

信じて祈っているか？

奥 村 健

中学部の生徒は昼食の前に、毎日「食前感謝の祈り」をその日の当番が行うことになっている。そのとき、聖書の授業での例文の影響もあるのだが、後半で「この恵みが、世界中のすべての人々にも与えられますように」と祈って、祈りを終える。

私は、この祈りを聞きながら、時々、不謹慎にもこの子たちは本当に、心の底からそう思って祈っているのだろうかと考えてしまうことがある。しかし、生徒たちは、この祈りの言葉が気にいっているというか、やはり、心のどこかで「本当に、そうであってほしい」と考えているのだと先日気づかされた。

それは、生徒との些細な会話のやりとりの中で気づかされたのである。生徒たちは食前の祈りを猛烈なスピードで行う。おなかが減っているから、早く食事にかかりたいからである。そこで、つい生徒に「そんなに、急ぐなら、『神様、今日もこの食事を感謝します。アーメン』でいいじゃないか」といってしまったのである。すると、生徒たちは猛然と反撃してきた。「いや、だめです。やっぱり世界中のすべての人に糧が与えられるように祈ることは大切なんです」というわけです。

よくよく考えてみると、そのときは、余り意識もしないで、呪文のように暗記した祈りの言葉を唱えているだけであるにしても、毎日毎日この祈りの言葉が耳に入ってきて、3年間の学びを終えたときには、自然と身についているんだなと感じさせられた。

「教育の勝負は長い」とはよく言われることではある。そんなことは重々分かっているつもりだったのに、私たちはついつい結果をすぐに求めてしまう。祈りながら、実は祈りに一番疑問を持っているのは私ではないのか。生徒たちは、自然に、いつかどこかでこの祈りは聞き届けられると信じる境地になってしまっているのである。むしろ、彼らはじぶんが信じていると意識しているわけではないでしょう。けれども、感謝すべきことに、神様はかれらにその芽を確実に育ててくださっていたのである。「私は植え、アポロは水を注いだ、しかし成長させてくださるのは主である」という聖書の言葉が実感されたことであった。

(中学部教諭)